

予想以上の日銀金融緩和で、日本市場は円安・株高・債券高

2010年10月5日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部  
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

## 米企業決算発表前にアナリストによる投資判断引き下げが相次ぎ、米国株は売りが広がる

欧州株式市場は、ドイツの9月の新車登録台数が前月比▲18%の大幅減となったことなどから自動車株が下げを主導し、各国ともに軒並み反落が目立ちました。ただし、ギリシャは8月の銀行預金残高が8ヶ月ぶりに増加したことが好感されて、銀行株が買い戻されてギリシャの主要株価指数はプラスで引けました。

一方、為替市場ではユーロ・ドルは5営業日ぶりに反落するなど、ユーロの弱さが目立ちました。アイルランド中銀が同国の2010年と2011年のGDP見通しを下方修正したことなどが悪材料視されました。米国株式市場はほぼ変わらずで寄り付きましたが、その後は利益確定売りが広がり、引けにかけて軟調な展開となりました。業種別ではアナリストによる投資判断引き上げ等を受けて自動車株は堅調でしたが、それ以外のセクターは下落が目立ちました。特に米コンピューターソフト大手や米アルミ大手がアナリストの投資判断引き下げを受けたことなどが嫌気されて、ハイテク株や素材株の軟調さが目立ちました。

8月の米中古住宅販売成約件数は+4.3%と2ヶ月連続で上昇し、予想(2.8%)も上回りました。また、8月の製造業受注指数は▲0.5%と予想(▲0.4%)よりもマイナスが大きかったものの、設備投資の先行指標とされる非国防資本財受注(航空機を除く)は+5.1%と前月(▲5.1%)より大幅に拡大し、10年3月以来の伸び率となりました。しかし、週末の雇用統計を見極めたいとの見方も根強く、市場の反応は限定的でした。

## 日銀の追加の金融緩和策を受けて円安・株高・債券高

日本株は小幅安で始まりましたが、その後もしばらく9,350円前後の水準で小安く推移しました。朝方は金融や小売などの内需関連セクター中心に安値を更新する銘柄が目立ち、相場の重しとなっていました。その後、金融関連株は持ち直しましたが、自動車株が下げ幅を拡大したことから、株価指数全体の動きはあまり見られませんでした。また、たばこ大手株が10月からのたばこの大幅値上げに伴う販売減少懸念から軟調に推移するなど、個別の悪材料も相場の重しとなりました。

正午過ぎ、豪の中央銀行が政策金利を5ヶ月連続で年4.5%で据え置くことを決定しました。8月の豪小売売上高の伸び率が前月比+0.3%と半年ぶりの低い伸び率にとどまるなど内需鈍化の兆しが見られるほか、今後1年は成長が鈍化するとの見方も示唆しました。市場では25bpの利上げが見込まれていたことなどから、豪ドルは急落し、市場全体はリスク回避傾向となりました。この流れを受けて、日本株にも下押し圧力がかかりました。しかし、14時前に日銀が追加の金融政策を発表し、国内市場の雰囲気は一変しました。政策金利を従来の1.0%から0-0.1%程度に引き下げたほか、物価安定が展望できるまで実質ゼロ金利政策を継続することを明確にしたほか、5兆円規模の資産買い入れ基金の創設も示唆しました。予想以上の緩和策を受けて、金利や円が急落し、7割近くの銘柄が下げていた日本株は一斉に上昇に転じました。結局、日経平均株価は+137円高の9,518円と大幅反発して引けました。

市場ではFRBの追加緩和観測も強く、今後も対ドルで円安が進むかどうかを占う上で、週末の米雇用統計に注目が集まりますが、当面、円高・ドル安に歯止めがかかれば、日本株への追い風となるものと思われます。

以上